

新米教師一年目の振り返り

林田 子竜（北海道函館聾学校 教諭）

【はじめに】

平成26年4月、私は北海道函館聾学校に新採用として赴任し、小学部2年1名の担任をさせていただきました。期限付き教諭として肢体不自由特別支援学校で勤務していたが、聴覚障がいのある子どもに対しての教育はもちろん、普通学校に準ずる教科学習を行うことすら初めての経験、担任を持つことも初めての一年であった。この一年を、【1 学習指導】【2 保護者との連携】の2点に焦点を絞って振り返る。

【1 学習指導】

学習指導では、自分自身の力のなさ、自己研鑽の足りなさでうまくいかない場面が多くあった。それを自分の課題として捉えられず、子どもに苦しい思いをさせてしまうことがあった。一年目の自分の学習指導を、反省しながら振り返る。

（1）子どものせいにして逃げていた日々

学習指導に関しては、とにかく良いと思った指導を真似することを行った。教師用指導書に書かれたもの、校内の先生方の授業、書籍や研修会、インターネット等で知った実践を真似て、担任している子どもの実態に合わせて変え、失敗しては反省しての繰り返しであった。

聴覚障がいのある子どもに対しての指導では、とにかく視覚的な教材が必要不可欠であることを学んだ。国語の学習では教科書を拡大したものを黒板に貼り、言葉での指示に合わせて指差しなどを行った。

私が担任していた子どもは学習規律の定着が難しい特性があり、学習への意欲もあるとはいえない状況であった。また、学習からの逃避を目的とした問題行動もあり、授業が授業にならない場面が度々あった。はじめは子どもの実態を捉えきれず、指導計画通りに授業が進まないことに焦りを感じて、子どものせいにして叱ってしまうことが多くあった。そうすることで、自分の努力が足りないことから目を背けてしまっていた。

（2）教師の責任と学び続けることの必要性

日々の経験や諸検査の結果等から子どもの特性を少しずつ把握し、それにあった教材や学習活動を準備することで子どもが意欲的に学習することができた時に、「すべては教師の責任なのだ。」と実感した。教師という役割の重大さとやりがいを改めて知った。

初任段階教員であることを活かし、とにかく様々な学びの場に参加させていただいた。全校授業研究でも周りの先生方に指導・助言をいただき、授業発表者としてたくさんのご意見を学ばせていただいた。北海道師範塾 道南車座講座で実践発表の場をいただき、私の拙い実践に助言・指導をいただいたことも大きな経験と学びであった。また、授業のユニバーサルデザインという考え方に出会い、自分が行っていた授業が子どもにとって分かり

づらく、意欲を持ちづらいものであったことに気付き、深く反省した。

学んだことを活用することで、自分自身の授業や子どもの学習の様子がわずかでも良くなったと感じ、学び続けることの大切さを感じる一年であった。

【2 保護者との連携】

私が担任していた子どもの保護者とは、定期的な懇談や毎週の学級通信、子どもの送り迎え（そのころは車で登下校していた）で訪れた際のやりとり等を通して情報の共有や連携を図った。目的が達成できたこともあれば、もちろん力が及ばなかったこともある。様々なできごとがあったが、二つの項目について振り返る。

（1）生活習慣の確立

前担任からの引継ぎや周りの先生からの話、実際に子どもや保護者との関わりの中で分かったことがあった。それは、担任していた子どもの生活習慣が確立していないということだった。

- ・朝食を食べずに登校する。
- ・朝は保護者の車で登校するため起床が遅い。
- ・就寝時刻は日によってまちまちである。

といった状況であった。家庭での生活習慣の確立は保護者の役割であるとは思いますが、それぞれに家庭の事情というものがあるのも確かである。保護者の思いや家庭環境についてよく理解し、それを尊重しながらこちらの思いを伝えていく必要がある。

はじめに、保護者が子どもの生活習慣についてどう考えているかを聞き取った。朝食は、保護者自身が摂らないため、食べる習慣がない。就寝と起床は適切な時間に行わせたいが、あれこれ言わずに子ども自身でできるようになって欲しいという考えであった。小学校低学年にとっての生活習慣の重要性と、生活習慣を子どもに身につけさせる方法を伝える必要があると思った。

諸先生方の助言をいただきながら、一年をかけて生活習慣の確立を目的に保護者と関わった。具体的には以下のような取り組みである。

①朝食について

- ・子どもが朝食を摂るとどんな良いことがあるか、摂らないとどんな悪いことがあるかを調べ、学級通信等で発信した。学級通信を流し読みすることを防ぐため、絶対に読んで欲しいところは口頭で伝えるようにした。
- ・朝食を摂ってきた時には、かかさず子どもが朝からこんなに良い様子を見せた、感謝している、ということを保護者に伝えた。

こうした取り組みを続けることで、保護者は次第に朝食の大切さを感じてくださり、今では毎日朝食を摂って登校するようになった。

②起床・就寝時刻について

- ・起床・就寝時刻を安定させることの重要性について訴え続けた。また、小学校低学年が自力で確立することはきわめて難しく、保護者の支援が必要であるこ

とも伝えた。

- ・今の子どもの年齢では何時間の睡眠が必要か、睡眠を適切に取ることでどんな良いことがあるか、起床してからどれくらいの時間で学習に向かう状態になるかを踏まえて何時に寝て何時に起きるのが良いかを伝えた。
- ・毎日、子どもから就寝・起床時刻を聞き取り、お願いした時刻であった場合は保護者に感謝の気持ちを伝えた。

こうした取り組みを続けることで、起床・就寝時刻も今では安定するようになった。

以上の2点のことについては改善されたと感じているが、まだ課題だと感じる点はいくつかある。生活習慣の確立は家庭の役割ではあるが、学校での子どもの様子に直結しているため、教師としては見過ごせない。また保護者は、課題と感じていない場合や、分かっているけどできない状況にある場合がある。こちらが踏み込めることとそうでないことがあり、また、家庭の状況をよく知らずにこちらの思いばかり伝えても改善されないとても難しい問題であると感じた。原因は何かをしっかりと考え、保護者と丁寧にかかわりながら共に考えていく必要があると学んだ。

(2) 学習習慣の確立

学習習慣の確立についても課題があると感じた。保護者に聞いてみると、以前は保護者も宿題を見ていたが、間違いなどを指導しているうちに親子の関係が悪くなると感じ、あまり見ないようになった。子どもが宿題をやったと嘘をつくことがあるとのことであった。

私は、宿題は学校が出すものであり、保護者が指導するものではないと考えている。また、毎日必ず取り組めるよう適切な量であり、内容についても、取り組みやすく子どもが自分から取り組もうとするような工夫が必要であると思う。そういった考えを保護者に伝え、毎日取り組むことだけを目標に宿題を出すと話をした

毎日宿題に取り組み、家庭での学習習慣を確立するために以下のような取り組みを行った。

- ・保護者に、家に帰ってきたら宿題をするという習慣を作ること、きちんと取り組んだら褒めるということだけをお願いした。
- ・算数の宿題では、間違えずに取り組めるよう、つまづきそうな問題にはヒントを書き込んで出した。
- ・漢字の宿題では、答えもいっしょに渡して分からなかったら見ていいことにした。
- ・宿題を少ない量から始め、子どもと相談しながら少しずつ増やしていった。
- ・宿題をやってきたらシールを貼る表を作り、成果が目に見えるようにした。
- ・シールがたまった表を懇談等で保護者に見せ、子どもを褒めていただいた。

こうした取り組みを続けることで、始めたころはプリント一枚であった宿題も、今では4～5枚分程度を毎日取り組んでくるようになった。

学習習慣の確立も家庭での役割ではあるが、学校が働きかけなくてはいけない場合があると学んだ。また、宿題を出すことの難しさや工夫についても学んだ。

【まとめ】

こうして一年間のことを振り返ることで、自分自身の取り組みやその結果、反省点や改善点を多く見直すことができた。改めて、自分の力が及ばない時に助けてくれるのは諸先生方や書籍、研修等から学んだことであると感じた。

今年度も同じ子どもを担当させていただいている。子どものことや保護者のことを一年間でそれなりに理解していたと思っていたが、今年度も悩み苦しむことばかりである。それに伴って、まだまだ学ばなければいけないという気持ちは強くなっている。

親たちが自分の命より大切に思っている子ども、これからの北海道や日本の未来に貢献する子ども、そんな尊い存在を育てる教師という仕事に、大きな責任ややりがいをととても強く感じている。この気持ちをこれからも持ち、自己研鑽に努める。